



シェイクスピア作品だけにつけられている「ロマンス劇」というジャンル。悲劇でも喜劇でも、歴史劇でもない「ロマンス劇」。本来は“ローマ的”という意味だが、いまはほんのり甘い香りを漂わせるニュアンスで使われることが多い。波瀾万丈、荒唐無稽、芝居ならではの飛躍と奇跡が満載の『シンペリン』で、とくとその意味をかみしめてみてはどうだろう。

INDEX

TALK

蜷川幸雄公開対談シリーズ NINAGAWA 千の目 第24回
こまどり姉妹×蜷川幸雄 03

PLAY

『シンペリン』×『海辺のカフカ』×『しみじみ日本・乃木大将』
蜷川幸雄 インタビュー 06

REPORT

『2012年・蒼白の少年少女たちによる「ハムレット」』
稽古場見学会レポート 09

PLAY

彩の国シェイクスピア・シリーズ第26弾
『トロイラスとクレシダ』 10

DANCE

システム カスタフィオール『スタンド・アローン・ゾーン』
Noism1 新作公演
『Nameless Voice ～水の庭、砂の家』 12

MUSIC

レ・ヴァン・フランセ 14

MUSIC

2012-2013 ピアノ・エトワール・シリーズ
Vol.18 エフゲニ・ボジャノフ／Vol.19 ヤン・リシエツキ／
Vol.20 河村尚子
ピアノ・エトワール・シリーズ アンコール！ Vol.1 ラファウ・ブレハッチ 16

REVIEW

2011.12-2012.2 彩の国のアーツ 19

EVENT CALENDAR & TICKET INFORMATION 20
THEATER BRIDGE 23

表紙：彩の国シェイクスピア・シリーズ第25弾『シンペリン』 編集：（公財）埼玉県芸術文化振興財団、佐藤 優 デザイン：Yellownotes inc.
©（公財）埼玉県芸術文化振興財団 Published on 15. MARCH 2012 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation
※掲載情報は、2012年2月20日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。



親子二代にわたってファンだという、こまどり姉妹のお二人の前に、いつもの蜷川節はどこへやら、頬はゆるみっぱなしで、すっかりミスター気分な蜷川幸雄。明るく話す苦労話にお客様の涙腺もゆるんで、会場は共感と感動につつまれました。

TALK

公開対談シリーズ第24回
NINAGAWA 千の目
歌手 演出家・彩の国さいたま芸術劇場芸術監督

こまどり姉妹 × 蜷川幸雄

Photo: 細野晋司

蜷川(以降N) 僕がどれほど感動しているか。父親も僕もファンで、今日はじっくりお話を聞きたいと思います。こまどり姉妹さんです、どうぞ。(拍手)どちらがお姉さんで、どちらが妹さんですか。
栄子(以降E) 私の方が、早く生まれて姉にされた栄子です。
敏子(以降T) 妹の敏子です。どうぞよろしく願いいたします。
N 今朝は何時に起きましたか。

E 私は4時半に起きて、お風呂に入ってからもう今は疲れております(笑)。
T この年になりますと、若い頃のように水分がすっかり取れないんです。やっとなまっけがついたという感じで(笑)。
N お2人の映画(『こまどり姉妹がやって来る ヤァ!ヤァ!ヤァ!』)をご覧になった方、手を挙げてくださいますか。
E あら、大分いらっしゃるのね。嬉しい

わね。
N 僕も拝見して感動しました。すごい経験をされていて、色んなことが歌にも反映されているんですね。『涙のラーメン』という歌がありますが、初めは何てシュールな歌なんだろうと思っていました。
T ナルトにシナチク、チャーシューですものね。
N 映画を観てわかりましたが、ラーメンが憧れの食べ物だったんですね。



E そうなの。あの頃はラーメンが最高のご馳走だったんです。流しの時はお金がないから食べられなくて、流しのお兄さんたちがおごってくれてね。

T 夜中に仕事が終わって、寒さも一段厳しい中で食べるので、なおさら美味しくて。

N 流しのスタートはお幾つでしたか。

E 11歳です。当時、お米は配給制でしたが、お母さんは担ぎ屋といって、お百姓さんから隠れてお米を買って売って歩いていました。だからいつもお巡りさんに捕まっていたね。そして、借金を背負って夜逃げをしたんです。私は温泉かどこかに連れて行ってくれるものだと思って、喜んでお母さんと最終の汽車に乗りました。私たちの町にも門付けの芸人がいてお金を貰うのを見ていたのでしょう。お母さんは太鼓を叩きながら民謡を歌い始めたんです。

T でも、何十軒何百軒まわっても誰も聞いてくれないの。ある家のおかみさんが、「後ろの双子の女の子が歌えばお金をあげる」と言って、母は「この子たちは歌えませ



こまどり姉妹(姉 長内栄子・妹 長内敏子) 1938年北海道釧路生まれ。51年、13歳で上京し、浅草を中心に流しの歌手として活動を始める。59年『浅草姉妹』でレコードデビュー。61年から7年連続してNHK紅白歌合戦に出場。『三味線渡り鳥』『石狩川』等のヒット曲を出すなど、スターこまどり姉妹の名を不動のものとするが、73年に妹・敏子の癌治療のため、一時活動休止。84年より活動再開。その後は現在まで、全国各地を飛び回り、ファンを魅了している。09年にはドキュメンタリー映画『こまどり姉妹がやって来る ヤァ! ヤァ! ヤァ!』が公開。08年、第50回日本レコード大賞功労賞受賞。



ん」と謝りましたが、私たちは親を助けたいし、お金をくれると言うので、死ぬ思いでひばりさんの『悲しき口笛』を歌いました。そうしたら、40～50人が私たちを取り囲んで、たくさんお金をくれたんです。それから、演歌師のお兄さんから夜の町の方が稼ぎがよいと教わったので、釧路、帯広

で流しをさせてもらってね。だけど親分さんがいるものですから、1日のあがりを全部渡して、明日のお米代と宿賃だけをもらうという生活でした。それで、私たちは東京に行こうと決心したんです。

N そして山谷(東京都台東区・荒川区にある寄せ場の通称)にいらしたと。

E 毎日夜中の3時4時まで働きずくめでした。でも、親の喜ぶ顔を見られたらいいと思ってね。終戦から4、5年の頃で、あの頃の子供たちはみんな靴を磨いたり、花を売って歩いて、親のために働いていました。

T 私たちの芸はお客さんに仕込まれたようなもので、ずるいお客さんは10曲も20曲も歌わせて、最後に「新内節の『蘭蝶』をやれ」なんて難しい曲を注文するんです。

N 新内なんかもやらされるのですか。

T まだ三味線も持っていない時で、「歌えないならお金は払わない」と言って追い出すの。そして、浅草の演歌師の人は私たちに、浅草で流しをさせない、だけど三味線を持

つなると言うわけ。人様の前で弾くには3年かかるという楽器ですから、タ力をくくっていたのね。でも、お母さんが月賦で三味線2挺借りてきて、先生を探して端唄の『夕暮れ』を仕込んでもらって、100曲弾けるような顔をして、1週間後に町に出て行きました。生きるために真剣でしたよ。

N ひばりさんもそうでしたが、あの頃は子どものスターが多かったですね。

T みんなマネージャーになって一儲けできると思って、私たちもよくレコード会社に連れて行ってくれたんですよ。

E でも、流しは軽蔑されていたでしょう。一番最低の仕事なので、「流しじゃだめ」とすぐ帰されちゃって。でも、コロンビアの社長さんは妹の声を聞いて、妹を歌手にしようと思ったのね。

T テストに呼ばれて、2人で行ったんですけど、ディレクターさんは「誰かにその辺で聞いてもらいなさいよ」と素っ気ない感じでね。そうしたら奥の小さなレッスン室からピアノが聞こえてきて、『十代の恋よ さようなら』で大ヒットしている神戸一郎さんと遠藤 実先生がいらして、私たちはそっと入って後ろの椅子に2人でちょこんと座ったの。流しとかをやってきて人馴れしていたのね、普通なら入れませんよ。

N そうですね。

T 後ろを向いたら、あか抜けないしゃべり格好の私たちがいるものですから、先生は「君たち何でそこにいるの」と言ってね。「誰かに聞いてもらうように言われました」と言うと、「じゃあ歌ってごらん」と言って



くださったんで、『裏町人生』とかひばりさんの歌を歌いました。演歌師をしてきた人の歌い方は特別で、それに昼間はちょっと声が枯れているんです。先生も演歌師をやっていたので、なお心にずんと沁みたでしょう。「実はこうこうで、流しをしていました」と話すと感動してくださって。先生はまだ他のレコード会社の専属で、コロンビアでは名前を変えて曲を書いて、島倉千代子さんの『からたち日記』が大ヒットしていた時でした。先生は元の会社に戻ろうかどうか迷って、熱海が伊東に雲隠れしたの。私たちが先生に会えなくて歌手を諦めていた時、先生は「僕がコロンビアに行かないとあの2人はデビューできないだろう」と思って、箸袋の裏に「お姉さんのつまびく 三味線に 唄ってあわせて 今日もゆく」と書いて「よし、行こう」と決心してくださって。本当に嬉しかったわね。

台本を読んだら、いつまでたっても私たちの出番がない……!?

N お2人は声質も違えば性格も違いますよね。よく喧嘩はされましたか。

T 喧嘩というより、仕事に関して、今日はどういう着物を着るとか、どういう話をするとかね。

E まあディスカッションですね。

T 姉妹というよりも仕事の相棒なんですよ。仲良く生きていくためには、相手の城に絶対に入らないことが条件です。

E ギャラでも何でも半分こするんです。

その使い方は全く知りませんし、お財布の中を見たことも、幾ら貯めているのかも聞いたことないしね(笑)。相手の個性は自分とは違うけれど、まあいいかと納得してずっとやってきました。

T それぞれの人格を育てていこうと思ったのが山谷時代でした。

E 13歳の頃です。浅草の町を60歳ぐらいの双子のおばさんが同じ洋服を着て手つないで歩いていたの。あんな年で同じものを着て、手をつないで、自分の人生も相手の人生もなく、ああやって歩いているのは自分にとって何だろうかと、双子に生まれてこれでいいのかと。その時にピンときまして、妹に「もう同じのを着るのはやめようよ。個性を出して、私が海辺を歩いたら、あなたは山の道を歩いて、それぞれの道を体験してお互いにそういう話をしましょうよ。同じ道を歩いたら何の意味もないでしょう」と言ったら、妹も納得してくれてね。

T だから便利なんですよ。1人ずつ別なことを体験していますので、本でも何でも健康にいいものなんてあると、「これをもう1つ買ってあなたにあげるから」なんてね(笑)。

N 僕は1969年から演出家をしていて、ずっとお2人に出演していただきたいと思っていました。僕らの芝居はお2人の歌に匹敵するものなのか、それを1つの目安にして仕事をしてきたところがあります。今度、僕たちの『ハムレット』という芝居に出ていただけるので、うわぁと物凄く喜びました。自分の演出史上最大の事件です。

E 初めてこの話を聞いた時はびっくりし

ました。でも、本当に感動しております。

T 「お芝居ですか？」とマネージャーに聞きましたら、「いや、歌1曲だけらしいよ」なんて言われて、「歌だけなら是非お願いします」と言って。台本をいただいて、最後まで読んでも私たちの出る場面が全然なくて、あら、どこに出るのかしらという感じでした(笑)。でも、それがまた興味があって、どこで出してくださるのか楽しみです。

N 出来の悪い若者を見たら蹴飛ばしてください(笑)。せっかくなので、みなさんから質問を……

観客A 両親の喜ぶ顔が見たいというその気持ちに本当に共感しています。私は今17歳で、愛知から東京に来て、下宿をして学校に通っています。両親が東京まで送り出してくれたので、どんなに悔しいことがあっても勉強だけはやめてはいけないと思っています。今こまどり姉妹のお2人がこれだけのことをされるエネルギーは、一体何のためにあるのでしょうか。

E 7歳で終戦を迎え、本当に厳しい時代でした。死ぬ思いを何十回、何百回もして、親は私たちを育てるために苦しみ痩せてしまっ。今にも死にそうな感じでしたので、親には何にも要求できませんでした。

T 学校に入っても、鉛筆1本なくてね。同情してくれる同級生が、「これに絵を描きなよ」とくれた画用紙1枚を大事に大事にして、借りたクレヨンで一生懸命描いた絵が、展覧会で金、銀をとったの。昔は「恩義を返す」という言葉がありました。自分を支えてくれた人に対して10倍でも100倍でも喜んでもらいたい、そういう人たちのために頑張ろうという思いですね。

E 人を憎まず、幾らいじめられても負けないで、自分は別の方からまた芽を出して、将来に向かって力をつけるという気持ちが大事です。くじけしないで努力してね。

観客A ありがとうございます。(拍手)

E 今日はこうして皆さんとお会いしてお話をさせていただいて、もう嬉しくて。涙がずっと止まらなくてしょうがないの。

T 顔も何もかも涙でぐしゃぐしゃで、つまづげが取れそうです。本当に申し訳ございません。

N 今日はお忙しいところ本当にありがとうございました。(拍手)